

歌誌 黄雞「冬号」投稿歌

山形 黒沼 貞志

歌題 アンソロジー 2010～2015 三

雪多き今年の冬を耐え抜きし狭庭に芽吹く小さき花々

大山の桜の片方に石鳥居年月重ね色で競へり

薰風に桜花舞い散る里山は春行くままに緑深まる

窓の外流るる新緑きらめいて列車の旅に期待膨らむ

昼休み丘の木陰に涼んでもスマホ離せぬ今の世の中

庭先に蝉と空蝉並びおり力尽きたるうつし身柔し

週一のフィットネス終え浸かるスパ簾を揺らす新涼の風

露天の湯すだれの先の石鳥居老舗の宿のもてなしの象 かたち

借景に色付く木々を配置して思い出づくりの蔵王は黄昏

取材受け紙面に載りし我が意見話題のTPPも身近となりぬ

時を経て様変わりたる自己表現渋谷にハロウィン国会にシールズ

昇陽の射し込む寺の石仏と共に佇む山茶花とわれ

忘れ雪これがそうねと語らいて重い腰上ぐ雪搔きの朝

雨音に目覚めし朝は寒九の日母に添寝の昔蘇えり

突然に戻りし寒の雪背負い地蔵の肩も少し重たげ

一首鑑賞

病む地球映すが如くひむがしの

空にあやしく赤き月出づ 菅原 育子

指定された範囲の十名の詠草の中から特に私の感性に響いた（かつて私も類
似の「情景」を詠んだことがあります）この一首を選びました。赤い月はスト
ロベリームーン（六月の満月を指す俗称）のことだろうと勝手に想定しました。
かつての私の詠草は単純な自然詠でしたが作者はその月の赤さから妖しきへ、
そして病む地球にまで発想を広げて社会詠とした着想・発想に特異性があると
思ったのが選定した理由です。 黒沼 貞志